

ビバハウス便り NO. 56 若者たちを一回り大きくしてくれた余市祭り
ビバハウス運営委員会 委員長 安達 俊子

このところ、小鳥たちやカラスたちが忙しく飛び回り、鳴き声も一段と大きくなった。巣づくりが始まったのだ。回りの自然界が一気に活気を帯びてきた。ビバを始めた頃は、若者たちは、この季節が一番辛い、この周りの勢いに自分たちはついていけないからだど嘆いた。でも今は違う。いっきに若者たちの動きが激しくなった。自分づくりのために、何か新しいものにチャレンジしたいとみんなが言う！そんな気運にみんながなっていく。

そこに来たのが余市の夏祭り、余市神社の例大祭だ。6月10日、11日の余市神社のお祭りに、今年はいままでで最多のメンバーが参加した。今年は特に両日ともウイークデーということでなかなか参加者を求めるのが難しいと、祭り参加のお話を持ってきてくれた奴頭の三浦さんから再三聞かされていたので、思い切って全員に参加を呼びかけた。先頭を切ったスタッフの島口先生の誘い方も巧みだったためか、清祓（せいぼつ・先頭でお清めの塩をまく係り）2人、奴さん6人、運転手2人の計10人ものメンバーが2日間フルに参加した。奴さんの総数は11名なので実に半分以上をビバメンバーが担ったことになる。『受け継ぎし祭りの日なりにぎにぎと山車繰り出でぬ夏迎えんと』（安達尚男）。ある意味で余市町の歴史と伝統を代表する余市神社の例大祭が、全国からのビバの若者たちの肩でしっかりと担ぎ上げられているのをこの目で見るのは本当に嬉しいことだ。

10日の日には、午前4時半に夫の車で若者たちは、その前に奴の衣装に調べて、余市神社に向かった。一日中町中を練り歩き、ビバに帰ってきたのはほぼ夜の9時ごろだったので、どれほど厳しい一日だったかは帰ってきた若者たちの顔色を見ただけで分かった。でも彼らの表情に表れていたのはただの疲労感だけではなかった。なんとも言えない充実感、「やったぜ！」という満足感のようなものが全員の表情に満ちていた。

彼らがこどもも語るのは、町の至る所で人々に、本当に温かい声をかけていただいたということだった。『お兄ちゃんは見かけないけど、どこから来たの？また来年も頑張ってるね！』と言われたという若者、中でも一人だけ女性で奴さんをやった、宮城県からきたA子さんは、どこでも大歓迎され、子供たちが、『可愛いおねえちゃんの奴さんだ！』と大はしゃぎされたり、自宅の玄関からは余り歩けないお年寄りに『副鈴』を駆け寄って渡したら、両手で拝まれたりしたとの話まで聞こえてきた。

最初は一日1万円のアルバイトということで、若者たちに「是非挑戦してみたら」とけしかけたようなお祭りへの参加が、こんな結果をもたらすとは全く思っていなかった。若者たちは、ある意味でビバに来てはじめて、無差別に大勢の町民の皆さんと向き合わされたようなことになった。でも町民の皆さんは、若者たちを温かく迎えてくださり、若者たちもその優しさを全身で素直に受け止めてくれたようだ。これがお祭りなのだ！

祭りに参加した全ての若者たちに、これまでに見られないような自信が感じられる。事実、ビバで一番若い17歳になったばかりの若者は、夫に連れられて、職場研修のため町内の自動車整備工場を訪れたが、会社の人も驚くほどの大きな声で自己紹介をしたという。